

The Character of Musicians:Differences of Help-Seeking Preferences among the Faculty of Music, Art, and Humanities.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kcua.repo.nii.ac.jp/records/323

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



論文

大学生における被援助志向性の視点から見た音楽家特性

— 一般大学生、美術系学生との比較 —

山 村 麻 予

The Character of Musicians:
Differences of Help-Seeking Preferences among the Faculty of Music, Art, and Humanities.

YAMAMURA, Asayo

The purpose of this study is to understand the sociality of students studying music. So, I compared them with those who study art and those who study at the university. I studied by collecting and analyzing data through questionnaire surveys. A total of 217 university students participated in the survey. They responded to an 11-item scale of Help-Seeking preferences. As the result, we understood the the need for help was not different from other students. On the other hand, students studying music and art have resistance to aid less than others. This meant that they had no negative feelings about being helped by others. In addition, it became clear that the only characteristic of students studying music was that they had a strong resistance to helping themselves.

1. 問題

音楽が、我々の日常生活と密接に関わり合っていることは広く知られていることである。また、心理学的見地からも、音楽を聴取することや演奏することと人間との関連は、様々な研究が行われてきた。たとえば、リズム即興における表現に性格特性が関連していること（中島・秋光・岡本 2004）をはじめとして、演奏行動には音楽家自身の特性が反映されることが示されている。また、聴取する側が音楽に対して感動を覚える程度についても、性格特性との関連が指摘されており（川上・中村・河瀬・安田・片平 2005）、音楽にまつわる行動と、それに関わる人間の性格特性には、深いつながりがあると言える。

しかしながら、音楽を演奏する者が、具体的にどのような個人特性を有しているかといった点に関する検討は、わが国において、数が少ないのが現状である。それに対して国外では、Kemp（1996）が、楽器演奏や声楽、指揮など音楽に携わる人々（以下、音楽家とする。）が、不安や内向性、自己充足性を高く持っており、このような特徴は音楽家特性と呼ぶことができることを指摘している。また、同時に専攻する楽器によってその特性は異なること、音楽家と

してのレベルによる差異についても、彼の研究のなかで示した。さらに、Ericsson, Krampe & Tesch-Ramer (1993) は、音楽家たちが若年のころに、個人レッスンははじめとした練習を、できる限り累積することで、演奏技術の水準が決められることを明らかにしている。これは、自己と演奏とが対峙する時間に長く耐えられる力を音楽家が有していることや、養成期間に孤独を経験していることを示しているともいえる。そして、ケンプ&ミルズ (2001) は、音楽を専攻する者は、繊細であり、演奏不安を有しており、精神的なバランスを常に意識し続けながら活動していると述べている。このように、音楽家やそれを目指す人々の特性として、性格に関しては、いくつかの検討が実施されてきた。

このような個人特性をもつ音楽家を取り巻く、昨今の環境の特徴として、他者と関わる必要性の高まりがあげられる。たとえば、演奏活動は集団で行うことが多く、活動を行う場を構成するためには、その場を作る他職種との連携も求められ、渉外の能力も必要となる。また、社会との繋がりを考えるうえで、アートキュレーションやアウトリーチといった活動の重要度も高まっている。しかし、砂田 (2007) は、音楽家の思考や気質は、社会性を乏しくしがちであり、アウトリーチ活動を有意義なものにしづらいつらといった側面があることを指摘した。この指摘については、音楽家の社会性が本当に乏しいのかといった疑問は残るものの、わが国におけるアウトリーチ活動が機能するための要因を考察する一つのヒントであるということができるといえる。砂田 (2007) が述べたように、彼らの思考や気質が音楽家養成のプロセスによって形成されたとするのであれば、養成期間に位置する音楽を専攻する学生たちの現状を検討し、わが国における音楽家特性、特に社会性がいかなるものかを検討する意義は高い。また、学生らは、他者比較と自己確立に挑む青年期に位置しており、この期間においては社会とのコミュニケーションが重要であることが知られている。したがって、本研究では、社会性の著しい変化が見られると予想される青年期に該当し、さらに音楽家養成過程の最中にある、音楽を専攻する芸術系大学の学生に焦点を当て、検討を行う。

さて、芸術系大学生の個人特性には、いくつかの事柄が知られている。まず、外部データを参照すると、精神障害や発達障害等の診断をもつ学生が他専攻より多い (日本学生支援機構 2018) ことである。発達障害の特性をもつ者は、うつや不安といった精神疾患を併発する事例も少なくない (本田, 2017) ことから、これらの2つの事象は循環的に関わっていると考えられる。次に、学生個人の評価が、一般の大学生や青年とは一部異なる点によるものがあることもあげられる。たとえば、芸術系大学では、一般の大学ではほとんど見られない「実技」に重要な評価が置かれており、毎学期に実技試験が実施されている。また、実態として成績評価や相互評価は、知的能力や人柄 (勤勉性等) だけでなく、技巧や才能といった側面にも影響をうけるといった様子もみられる。一般社会では、時としてネガティブに捉えられることもある「ヘンジン (変人)」「変わった人」「個性的」といった言葉がポジティブに解釈され、反対にポジティブ評価として用いられることが多い「いい子」「きちんとしている」「まじめ」といった言葉が

ネガティブ評価となりうることもあるという。そして、言語コミュニケーションを「不得意だ」と認識している者の多さも特徴である。これは、筆者が授業中に実施した、コミュニケーションに関するアンケートでの回答からも明らかである。音楽学部4年生を対象とした授業において、「大勢の前でスピーチをする」に対して「自信がない」と答えた者は57%おり、他にも「グループワークや議論で主導権をとる」(54%)、「雑談をする」(48%)、「話しながら次に話すことを相手に伝わりやすいように組み立てる」(48%)といった項目に対する苦手意識の表れがみられた。一対一でのコミュニケーションはそれほど苦手ではないものの、一対多での言葉を介した意思疎通場面は難しさがあるようである。

そこで、このような“特徴”をもつ音楽を専攻する学生の社会性について検討を行う。具体的には、社会性の中でも、他者との交流のきっかけになりうる「助け合う」場面で重要な役割を担う、被援助志向性を用いる。水野・石隈(1999)では、「個人が情緒的・行動的および現実世界における中心的な問題で、カウンセリングやメンタルヘルス・サービスの専門家、教師などの職業的な援助者、および友人・家族などのインフォーマルな援助者に援助を求めるかどうかについての認知的枠組み」と定義されている。つまり、自分が助けられることに対する志向性である。このような志向によって、他者との援助的関わりに対する認知的ハードルを検討することができ、社会的行動についての意図性や準備性に関する一つの資料になりうると考えられる。

以上により、本研究では社会性の一側面として被援助志向性をとりあげ、その在り方が、音楽を専攻する大学生と一般青年とどのように異なるのか、共通点はあるのかといった点を検討する。さらに、同じく「芸術家」とひとくくりにされることが多い美術専攻者とも比較を行い、音楽家特性の詳細を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2.1. 対象 関西圏の大学に通う大学生217名(男性59名、女性158名)。その所属の内訳は、総合大学文系学部95名(男性39名、女性56名)、芸術大学音楽系学部69名(男性12名、女性57名)、美術系学部53名(男性8名、女性45名)であった。一般青年の代表として、総合大学の学生をとりあげたのは、同じ高等教育機関に在籍し、社会人となる準備期間にあることと、学生生活に多くの時間を割いているためである。また、男女比率が、芸術系大学に比較的類似している文系学部に在籍する学生の協力を得た。

2.2. 手続き それぞれ、2010年度、2017年度から2018年度に開講された、心理学に関連する大学講義内にて、質問紙を一斉実施した。はじめに、調査者が注意事項ならびに後述の倫理配慮事項を読み上げ、内容に同意できた場合のみ回答に移るように指示をしてから回答を求めた。回答に要した時間は、およそ10分程度であった。

2.3. 質問項目の内容 まず、所属を尋ねる項目として、学年、学部(専攻)、性別を記入す

るように求めた。その後、社会性に関する質問項目を提示した。

教示には、「助けること、助けられることについてあなたの考えについてお尋ねします。これから示されるいくつかの項目について、あなたの考えに最も近い番号に丸をつけてください」という文章を使用した。具体的な内容には、被援助志向性尺度（田村・石隈, 2001）11項目を使用し、回答は「あてはまる（4）」から「あてはまらない（1）」の4件法で求めた。なお、提示の方法としては、芸術系大学の学生については、講義室前方に用意したスクリーンに項目を投影し、回答用紙に自身の回答を記入するよう指示した。また、総合大学の学生については、紙媒体でのアンケート冊子を作成し、実施した。なお、総合大学については、山村（2017）で使用したデータの再分析であり、当該研究は児童期にも同様の質問項目を使用していたために表現を平易なものに変更しているものがあるため、原尺度と異なるものが含まれている。

2. 4. 倫理的配慮 本調査については、個人ではなく、ある専攻分野に属する集団の特性に関する検討を目的としており、そのための調査においては直接身体的・精神的影響はなく、有害事象としての不利益は生じない。また、質問紙回収によって得られる可能性のある個人情報については、匿名化して管理した。質問内容については、心理学を専攻する教員数名に対して確認を求め、倫理上問題がないことを確認してから実施した。さらに、質問紙への回答は任意であり、途中で回答を取りやめてもよいこと、回答の有無や詳細は成績に関係がないこと、個人が特定されないように処理を行い、質問紙自体は速やかに破棄することを説明し、同意が得られた場合のみ研究に使用することを参加者に明示した。

3. 結果

3. 1. 因子分析

使用した尺度について因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行ったところ、固有値の減衰状況から、原尺度通りの2因子が妥当と判断し、再度回転させた。その結果1項目を削除したところで収束した（Table 1）。2因子の累積負荷量は36.07%、内的妥当性を表すアルファ係数は、順に.74と.62であり、十分な値ではないものの、許容の範囲であることが確認された。抽出された因子は、それぞれ「困っていることを解決するために、自分と一緒に対処してくれる人がほしい」といった6項目からなる「援助希求」と、「他人からの助言や援助を受けることに、抵抗がある」などの4項目からなる「援助抵抗」と命名した。確定した因子について、逆転項目を処理した上で項目平均を計算し、因子得点を算出した（範囲：1-4点）。

3. 2. 所属による因子得点の違い

因子得点を算出したのち、所属（一般・音楽・美術）による違いを検討するため、それぞれの因子得点を従属変数とし、一要因分散分析を行なった。

その結果、援助希求については有意な差がなく（ $F(2, 214) = 1.69, p = .19$ ）、援助抵抗におい

ては有意差がみられた ($F(2, 214) = 46.56, p = .00$)。多重比較 (Tukey 法) を行なったところ、一般 > 音楽 ($p = .00$)、一般 > 美術 ($p = .00$) であることが明らかとなった (Table 2, Figure 1)。また、本調査協力者の男女バランスを考慮し、女性のみを抽出して同様の分析を行ったとこ

Table 1 被援助志向性の因子分析結果

		援助希求 $\alpha = .74$	援助抵抗 $\alpha = .62$
	困っていることを解決するために、自分と一緒に対処してくれる人がほしい	.69	.26
	つらいときは、誰かに助けてほしい	.68	-.03
	悩み事が合ったら、話をしてくれる人がほしい	.60	-.11
逆転	自分が悩んでいるとき、周りの人には、構わないでほしい	-.50	.24
	これからも、周りの人に助けてもらいながら、うまくやっていきたい	.48	-.25
逆転	どんなことでも、人に頼らず、自分で解決したい	-.43	.28
	人に助けてもらうことが、嫌だなあと思うことがある	-.36	.60
	周りの人のアドバイスは、役に立たないこともある	.01	.57
	誰かに相談したり、「手伝ってほしい」というとき、悪いなあと思う	.02	.48
	自分で頑張れることは、人に頼らない	-.34	.47
因子間相関			-0.32

Table 2 所属別にみた平均値

	一般 (n=95)	音楽 (n=69)	美術 (n=53)	F 値	
援助希求	2.99 (0.53)	2.85 (0.49)	2.88 (0.57)	1.69	n.s.
援助抵抗	2.88 (0.42)	2.14 (0.58)	2.25 (0.60)	46.56	***

*** $p < .001$ (カッコ内はSDを表す)

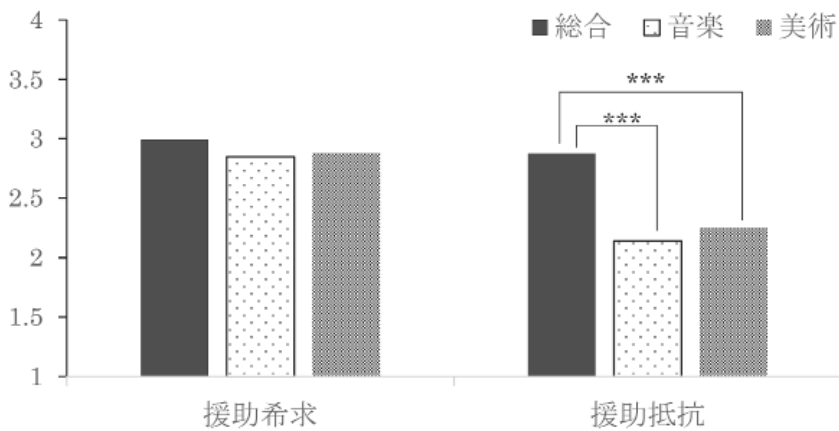


Figure 1 所属ごとの平均値

*** $p < .001$

Table 3 所属別にみた平均値 (女子のみ)

	一般 (n=56)		音楽 (n=57)		美術 (n=45)		F 値	
援助希求	3.06	0.52	3.06	0.52	2.88	0.60	2.05	n.s.
援助抵抗	2.82	0.40	2.11	0.59	2.24	0.61	27.52	***

*** $p < .001$ (カッコ内はSDを表す)

る (Table 3)、上記と同じく、援助希求には有意差がみられず、援助抵抗性には所属による差が確認された (順に $F(2, 155) = 2.05, p = .13$, $F(2, 155) = 27.52, p = .00$)。Tukey 法による多重比較の結果、一般 > 音楽 ($p = .00$)、一般 > 美術 ($p = .00$) であることが確認された。

3.3. 項目単位の比較

さらに詳細に検討を行うため、全項目に対して、所属による平均の違いを検討した。具体的には、所属を独立変数においた一要因分散分析を実施し、有意な差が見られたものについては Tukey 法による多重比較をおこなった。その結果、11 項目中、6 項目で有意な差が確認された。以下では、有意差が見られた項目のみを示す。また、表記の混乱を逃れるため、項目別分析に関してのみ、逆転項目を処理しない状態での検定を行う。

まず、援助希求に関する項目について、「①困っていることを解決するために、自分と一緒に対処してくれる人がほしい」($F(2, 214) = 15.36, p = .00$) である。これは、音楽・美術それぞれにくらべて、総合大学の学生で有意に得点が高かった (順に、 $p = .00, p = .00$)。

つづいて、援助に対する抵抗感を示す項目では、因子分析では削除されたものを含めて 5 項目全てで有意差が見られた。具体的な項目は、「②自分は、よほどのことがない限り、人に相談することがない」($F(2, 214) = 9.75, p = .00$)、「③他人の援助や助言は、あまり役立たないと思っている」($F(2, 214) = 98.81, p = .00$)、「④誰かに相談したり、「手伝ってほしい」というとき、悪いなあと思う」($F(2, 214) = 11.05, p = .00$) である。これら 3 項目は、いずれも総合大学の学生が、音楽・美術にくらべて得点が高い傾向が見られた (いずれも一般 > 音楽については $p = .00$ 、一般 > 美術では $p > .05$)。そして、「⑤人に助けてもらうことが、嫌だなあと思うことがある」($F(2, 214) = 7.61, p = .001$) では、総合大学と音楽学部の間のみ差がみられ、音楽学部が有意に低かった。さいごに、「⑥他人を助けたり手伝ったりすることは、面倒くさい」($F(2, 214) = 3.75, p = .0025$) において、音楽と美術の間に有意さが確認された。音楽学部の方が、美術学部より得点が高かった。これらの結果を図示したものを、Figure2 に示す。なお、項目については表示上、本文中で示した項目番号を付す。

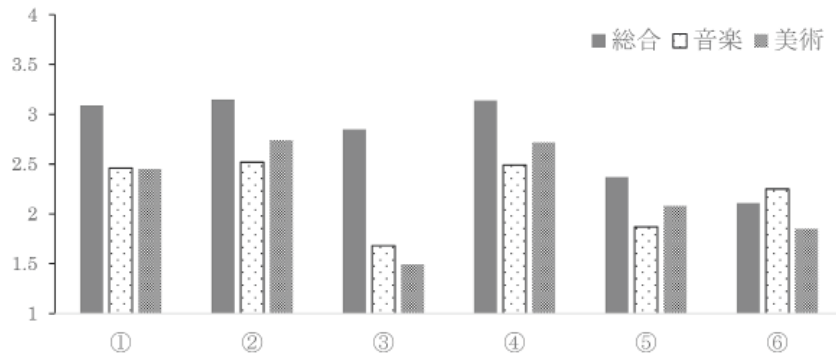


Figure 2 項目単位の分析

※図中の①～⑥は、本文中の項目番号に対応

4. 考察

4.1. 本研究のまとめ

本研究は、社会性の一側面として被援助志向性をとりあげ、音楽を専攻する学生と一般青年、美術系学部の学生との相違点を検討し、音楽家特性といわれる“音楽専攻者がもつ特性”の一部を明らかにすることが目的であった。質問紙調査の結果、音楽家・美術家の特徴として、援助に対する抵抗が低いことが明らかになった。芸術系大学の場合、自身の専攻する対象を深めていくためには、特定の先生に師事し、その教えを請うことが多い。これは、研究室に所属して一部の教員の指導を受ける一般の総合大学の学生に比べると、教員（師匠）との関係性は非常に密であり、特殊であると考えられる。なぜなら、研究指導の多くは高学年から開始されることが多く、またゼミと呼ばれる指導時間はそれほど長くないためである。したがって、芸術系を専攻する学生では、技術や表現力といったことを享受される場において、他者からの援助（助言、指導）を直接的に受ける機会は多くなるため、その他者行動を受容する素地が形成されることが、総合大学生よりも抵抗性が低い要因の一つとして考えられる。自尊心と援助志向性の関連を検討している脇本（2008）は、自尊心が安定している場合、自尊心の高さが援助志向性に正の影響を、不安定な場合は負の影響を与えることを示している。つまり、ケンプ&ミルズ（2001）の指摘する精神バランスを常に意識する音楽家にとって、自尊心を高く持っていることが、援助志向性（希求）を低めずに維持できている要因であると考えられる。脇本（2008）は同時に援助要請にも類似した傾向性を見出しており、志向性にとどまらず、実際の行動にも同じような影響がみられることが示唆された。さらに、援助抵抗性が低い一方で、援助を他者に求める程度については、一般大学生と同程度であり、極端な他者への依存心をもつことはなく、また、自立した考えを有していることがわかる。これらのことから、援助をする・されることに対して、フラットな感覚をもっていることが明らかとなった。

さらに、項目単位で検討を行ったところ、半数の項目で一般大学生との差がみられ、一部の項目で音楽・美術間にも差がみられた。まず、総合大学の学生との差については、援助されることに対する直接的なネガティブ感情の生起が低いことがある。たとえば、援助をされる際に感じる心理的負債感（申し訳なさ）や、拒否感（嫌だなあという感覚）のことをさす。援助行動が、行動主と行動の受け手とのそれぞれに与えるネガティブな影響については、これまでの研究でいくつか指摘されている。たとえば、被援助者（助けられる側）が自尊心への脅威や心理的負債感を覚えること（野崎・石井 2004）や、反対に行為者が援助することによって「相手に不快感を与えるかもしれない」といった傷つけ懸念を感じる（満野・三浦 2010）である。このような感情に対しての質問について、一般大学生よりも、音楽系の学生は低い得点を示している。つまり、援助を受けることに対する感情や、援助をしている相手が覚えるかもしれない不快感に対する認知はそれほど高くないといえることができる。しかしながら、これもまた音楽系学生の一つの特徴として、「他人を助けたり手伝ったりすることは、面倒くさい」という感覚は、一般青年とのみならず、美術を専攻する学生とも、比較すると高い傾向を示した。つまり、自分が援助を受ける側にあるときの感情反応と、自分が援助をするときの感情反応には、ずれがあるようである。

4.2. 本研究の独自性

本研究では、音楽系学生に焦点を当て、彼らの社会性の特徴について検討をしたことに大きな独自性がある。これまでの研究では、芸術、とくに音楽に関しては、聴取による心理的影響や、演奏行動に影響を与える要因などに焦点が当てられてきたが、本研究は音楽に関わる当事者（音楽家）自身の特性に焦点を当てている。さらに、性格などの個人特性ではなく、昨今で重要視されているコミュニケーションに深く関わる社会性を取り上げたことで、今後の環境との相互作用や社会的行動との関連性につながる資料としての役割を担うことが考えられる。これに加え、他業種連携や他者との協働が求められる現代社会へ巣立つ芸大生に対するコミュニケーション教育についての考えるための一材となりうることも考えられる。援助を受けることに対する抵抗性の低さや自立心の高さ、そして援助に依存しすぎることをない彼らの社会性に対して、アプローチするための重要な資料となることが期待される。

4.3. 今後の展望と課題

本研究で得られた知見を総合的に考えると、音楽に携わる者は他者からの援助を受け入れることに長けていることから、彼らとのコミュニケーションにおいては明示的な支援行動が適切であると考えられる。困窮事態において、援助を提供するときに、その意図とこれからしようとする行動を明らかにした上で接することで、自律性を尊重した上で、適切な支援が可能になるであろう。しかし、このようなコミュニティでは少数派となりうるような、援助抵抗性の高

い傾向をもつ学生がいた場合、不適応が発生しかねないとも考えられるため、引き続き他側面からも音楽家特性・文化について検討を行う必要がある。

また、本研究にはいくつかの課題がのこる。第一は、対象者の狭さである。調査協力を得た学生は、対象とすべき母集団の一部であり、さらに心理学関連の講義を受講しているといった要因が含まれている。つまり、対象外となった学生と比べて、自他の心理的側面に対する興味関心が強い可能性があり、より多くの対象者に対して、同様の、あるいはさらに発展的な検討を行う必要がある。第二に、質問紙調査といった量的側面からのみの検討にとどまっている点である。コミュニケーションや社会性といった、他者との相互関係を踏まえた側面を検討するのであれば、インタビューや観察といった質的側面からも考えるべきである。この点については、今後、実際の行動がどのようになっているかといった実態調査も含め、さらなるフォローが必要である。そして最後に、音楽や美術を専攻する学生が生きる学校、そしてその学生たちが巣立つ社会環境の詳細分析が不足している点である。いずれも、他の総合大学や他職種に比べると特殊である。たとえば師弟関係の強さや、ある仕事を達成するために必要な工程など、「音楽ならでは」「美術ならでは」といった事柄は多いと予想される。しかしながら、これまでにその特徴を整理し、明らかにした研究はほとんど見られない。これを明らかにすることは、芸術専攻の学生が自身の独自性を理解した上で他者との交流をはかったり、また外部者がそのような学生たちに接するときの基盤となったり、コミュニケーションや社会的行動を考えるうえで不可欠である。そして、本研究で取り上げた社会性は、環境との相互作用は不可欠である。そのため、彼らを取り巻く環境といった視点を含めたうえで、さらなる検討が求められているといえる。

5. 謝辞

本調査に参加いただいた大学生の皆さんに感謝申し上げます。また、本研究は、第30回日本発達心理学会大会（於：早稲田大学）にてポスター発表した内容を一部修正・加筆して構成しています。

<引用文献>

A.E. ケンプ & J. ミルズ 2001 「音楽的潜在能力 (Musical Potential)」 [R. パーンカット & G.E. マクファーソン 編(安達真由美・小川容子 監訳) 2011 「演奏を支える心と科学」 3-25 頁 誠信書房、東京]。

Ericsson, K.A. Krampe, R.T. & Tesch-Romer, C. 1993 “The role of deliberate practice in the acquisition of expert performance” *Psychological Review*, 100 (3) 363-406 (DOI:10.1037//0033-295X.100.3.363)。

本田秀夫 2017 「大人になった発達障害」 認知神経科学会『認知神経科学』19巻1号；

33-39。

- 川上 愛・中村敏枝・河瀬諭・安田晶子・片平 建史 2005 「音楽聴取時の感動と性格特性の関係について」 日本認知心理学会『日本認知心理学会発表論文集』2005 巻；56 ページ。
- Kemp, A. E. 1996 *The Musical Temperament: Psychology and Personality of Musicians.* Oxford University Press.
- 満野史子・三浦香苗 2010 「大学生の思いやり行動躊躇と対人関係特性の関連」 昭和女子大学『昭和女子大学生活心理研究所紀要』12 巻；75-85。
- 水野治久・石隈利紀 1999 「被援助志向性、被援助行動に関する研究の動向」 日本教育心理学会『教育心理学研究』47 巻；530-539 ページ。
- 中島 美穂・秋光恵子・岡本祐子 2004 「音楽のリズム即興における表現特徴と性格特性との関連性について」 広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センター『広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要』3 巻；66-77。
- 日本学生支援機構 2018 「平成 28 年度（2016 年度）障害のある学生の修学支援に関する実態調査」（2019 年 12 月 20 日閲覧）；https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/2016.html。
- 野崎秀正・石井眞治 2004 「抑制要因に基づく大学生の援助要請行動の分類」 広島大学大学院教育学研究科『広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部』53 巻；49-54。
- 砂田和道 2007 「クラシック音楽におけるアウトリーチ活動とそれに関わる音楽家養成の課題」 文化経済学会『文化経済学』5 巻 3 号；87-99。
- 田村修一・石隈利紀 2001 「中学校教師の被援助志向性に関する研究：状態・特性被援助志向性尺度の作成および信頼性と妥当性の検討」 日本教育心理学会『教育心理学研究』54 巻 1 号；75-89。
- 脇本竜太郎 2008 「自尊心の高低と不安定性が被援助志向性・援助要請に及ぼす影響」 日本グループ・ダイナミックス学会『実験社会心理学研究』47 巻 2 号；160-168。
- 山村麻予 2017 「葛藤場面における向社会的行動方略の発達的变化：小学生と大学生の比較から」 人間環境学会『人間環境学研究』15 巻 1 号；9-15 ページ。